

ゆふ日冷えゆく巖の上に：文苑

著者	芒村
雑誌名	龍南會雜誌
巻	105
ページ	29-30
発行年	1904-03-13
その他の言語のタイトル	ゆう日冷えゆく巖の上に：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5670

ゆふ日冷えゆく巖の上に

ゆふ日ひねゆく巖の上に

われは聖なるうたをきけり。

水にうつらふ夕雲の

うちにかがやくゆふづきは

むかしカナンの地をさし

こころやさしき伶人が

きよけき魂のこもりつ

とうとき光はなつらん。

うるくづめぐるわたつみの

藻草の花のおく深く

さびくちはてし古謡

わきてながるゝゆふ汐の

つめたき肌を咀ふらん

今しひひねゆくゆふぐれの

光さびしき海のおく

吾は聖なるうたをきけり。

芒 村

ラインす河のたろがれの

ながれしづけき水底に

しづみて失せし少女子が

波に漂ふうたのごと

かすかにさわれ力ある

とうときひびきさながらに

ららにひらめく靈光の

裡の御聲に似たりけり。

かほりもたかき花薔薇

御苑の奥の春深く

聖なる幔におほはれし

彼の樂堂の曙に

世をはなれたるうたびどが

神を讀するうたのごと

み空の雲にひびきつ

人の世とほくとよむかな。

あゝ人の子上手をあけて

吾ぞきよきと云ふなけれ

命しかがやくゆふつつの

けだかきすがたさながらに

レバノシ山の峯高く

橄欖の葉にてりそひし

昔のかげにかはりなく

さまらかなるをはぢざるや。

きかずやとほくゆふ汐の

湧き立ち返るうみのはて

けがれわすれて命はたゞ

きよきを思ふ吾胸に

無限の思おこさせつ

かすかにひびく彼のうたを、

あゝ人の子上手をあけて

吾ぞきよきと云ふなけれ。

み空の光おほうみの

さはみにしづみゆくところ

ゆふべの雲のうのそらに

たへなる姿想ひては

思はたかく氣は遠く

むかしの選民をしのびつゝ

あゝ——ゆふ日ひねゆく巖の上に

吾は聖なるうたをさけり

俳句

焼野山 紫溟吟社

大松に焼野の道の分れけり 藤坊

有明の山や頂に焼けめぐる 全

百日紅

夕暮に野を焼く人の話哉

面白う焼け移り行く廣野かな
山焼いてアイヌが長の祈かな

南斗